

## ◎特集：パリの朝香宮

開館20周年記念「<sup>スタイル</sup>アール・デコ様式 朝香宮がみたパリ」展より

Exposition LE STYLE ART DECO  
à travers les yeux du Prince Asaka



図1

くのみやあさひこ やすひこ  
久邇宮朝彦親王の第8王子鳩彦殿下が、「朝香宮」の宮号を賜って一家を創立したのは1906(明治39)年のことでした。殿下は1910(明治43)年、明治天皇の第8皇女允子内親王<sup>のぶこ</sup>と結婚し、二男二女に恵まれました。1922(大正11)年10月30日、陸軍歩兵中佐であった鳩彦殿下は、「軍事御研究」の名目で家族を日本に残し、「朝伯爵」の仮名で欧州遊学の途に就きました(図1)。

客船による船旅が欧亜連絡ルートの主流であった当時は、日本を出発してからパリに到着するまで、約40日間の日数を要したとされています。殿下は欧州航路の定期客船伏見丸に乗船し、上海、香港、シンガポール、コロンボを経てスエズ運河に達し、ポートサイド寄港の際にはピラミッド見学などを行いながら、12月10日 マルセイユに上陸、翌日ようやくパリに到着されました。

当時パリには鳩彦殿下の従兄弟にあたる北白川宮成久王<sup>なるひさ</sup>ご夫妻が滞在中でした。成久王は殿下の近況を、日本に残る允子妃殿下に宛てて「……殿下モ御着以来大変御元氣デステニ“ハリーチアン”<sup>ママ</sup>\*1ニナラレツ、アリマス……」と書

き送っています。初めて訪れた活気溢れるパリの街で、あらゆるものに好奇心旺盛なまなざしを注ぐ、若き皇族の澁刺<sup>はつらつ</sup>とした姿が目には浮かぶようです。

鳩彦殿下は1922(大正11)年の暮れから新年にかけて、北白川宮ご夫妻と一緒にヨーロッパ・アルプスの景勝地、シャモニーへ旅行しています。この時のことを、殿下は允子妃に宛てた絵葉書の中で、「私ノ様ナ田舎者ハ服ヤ其他ノ関係テ新年ヲ巴里テ迎ヘル事カ出来ナイソレタカラ都落シテシャモニクスニ来テ新年ヲ迎ヘマシタ……」と記しています。殿下のユーモアが利いた表現の中にも、「狂乱の20年代」といわれた、第一次世界大戦後の好況に沸くパリの華やかな様子が偲べれます。

旅行から戻った鳩彦殿下は、凱旋門の西方に広がる16区の、マラコフ通り88番地のアパートマン6階に居を定めます。約2年半に渡り「パリの朝香宮邸(朝伯爵邸)」となったヴィクトル・ユゴー広場に近いアパートマンとその界限は、当時の佇まいを今日でもよく残しています(図2)。



図2

図1. 鳩彦殿下の渡欧を伝える「婦人画報」1922(大正11)年12月号。資料提供:アセット婦人画報社

図2.「朝伯爵邸」があったマラコフ通り88番地のアパートマン。両殿下のお住まいは最上階にありました。この付近は現在レイモン・ボワカレ通りと改称されています。

\*1. パリジャン(パリ風の男性)のこと。

\*2. 北白川宮房子妃殿下は明治天皇の第7皇女で、朝香宮允子妃殿下の実姉にあたります。

\*3.「東京都庭園美術館ニュース」第5号、「旧朝香宮邸の歴史を訪ねて/第4回・朝香宮家の人々(後編)」に収載。

\*4. オートクローム法:フランスのリュミエール兄弟によって1907年に製品化されたカラー透明陽画。

1923(大正12)年4月1日、北白川宮ご夫妻とともにノルマンディー方面にドライブに出かけた鳩彦殿下は、パリから150kmあまり隔たったエブルー郊外の村、ペリエ・ラ・カンパーニュ付近で交通事故に遭って重傷を負われました。この事故で車を運転していた北白川宮成久王は薨去され、鳩彦殿下の義姉にあたる房子妃も重体と診断されました(図3)。

事故の報に接した允子妃殿下は、夫と実姉<sup>\*2</sup>の看護のために急遽渡仏、幸いにも妃殿下が到着する頃には、パリ郊外ヌイーの病院に入院中であった両殿下も、外科の権威アンリ・アル



図3

トマン医師の治療を受けて順調に快方へと向かっていました。

北白川宮房子妃は退院後まもなく帰国しましたが、鳩彦殿下はパリに留まり、允子妃に付き添われて療養を続けていました。事故から80年が経過した今日、リハビリを兼ねてプーローニュの森を散策するお二人の仲睦まじい写真が残されています<sup>\*3</sup>。

事故の傷が癒えると、両殿下は、イギリス、スイス、ベルギー、イタリア、ドイツなど欧州各国の巡遊旅行へと向かい、南仏カップ・マルタンのアルベール・カーン邸では、当時非常に珍しかったカラー写真<sup>\*4</sup>のモデルになったこともありました(表紙)。日本とも関係の深かった銀行家カーンの親交は、両殿下の帰国後も続けられることとなります。1925(大正14)年7月9日、両殿下はかねてから開催中であった「現代装飾美術・産業美術



図4

国際博覧会(アール・デコ博)を見学されました。その際に撮影されたニュース映像が、現在もパリで大切に保存されています。美術局長ポール・レオンに先導されて見学する妃殿下のお顔には満面の笑みが浮かび、博覧会がいかに印象深いものであったかを端的に物語っているかのようです(図4)。

両殿下は同年12月にアメリカ経由で帰国した後、1933(昭和8)年パリでの生活経験を活かして、アール・デコ様式の新築宮邸(現東京都庭園美術館)を完成させました。その室内は、滞欧時代の思い出深い品々で満たされていたということです。(牟田)

図3.ペリエ・ラ・カンパーニュ村の事故現場に建つ北白川宮成久王の慰霊碑。

図4.美術局長レオン(後姿)の案内でパヴィリオンを見学する允子妃殿下(左端)と鳩彦殿下(右より二人目)。

図5.パリのアバルトマンでの記念撮影。両殿下と杉岡侍女、御世話係を務めたフランス人女性。



図5